

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



無神論者との対話

キリスト新聞社の招きで、オックスフォード大学の神学教授アリスター・マクグラスと対談した。現代イギリスでもっとも高名な神学者を2時間間にわたって独占し、神学と現代世界について聞きたいことを聞くという、まことに幸

いなひとときであった。ウェブで彼の名前を検索すると、たくさんの方談を見ると、たくさんの対談を見る事ができる。特に、オックスフォード大学の生物学者リチャード・ドーキンスとの対話や、エディンバラ大学で行われた化学者ピーター・アトキンスとの対論などが興味深い。前者は、『利己的な遺伝

子』『神は妄想である』などの著作で一般にもよく知られた無神論者である。そこでわたしは、これらを話題に選んだ。なぜあなたは、無神論者との対話に熱心なのか。そう尋ねると、マクグラスはこんなふうにご答えてくれた。自分も若い頃は分子生物学者で、科

学を唯一の真理と考える無神論者であったが、やがてその誤りに気づかされた。今日、科学の名のもとに無神論を標榜する人々は、科学を誤って代弁している。だからそのような似非科学主義を訂正したいのだ、と。

マクグラスは、彼の無神論に見え隠れする「怒り」についてマクグラスに尋ねられ、自分の怒りの理由をいくつか挙げていた。いわく、宗教は人間理性の自由な行使を妨げ

る。神はこの世界の悪や不条理に無関心である。宗教は子どもたちを洗脳して自爆テロを起こさせる。宗教は紛争と対立の原因である、など。これらは、現代日本でも聞かれる宗教批判と重なるので、断と同じように、個人の実存の核における経験や感情に発している。それを露呈させるのが、この問いの意図ではなかったか。そう尋ねると、彼は非常に嬉しそうであった。

マクグラスとの対談

無神論の黄昏

だがわたしは、彼のこの問いに別の意図があると感じた。科学的で客観的な結論を装う無神論も、実は信仰の決

後の飛行機が乗客たちの抵抗により目的を達成できなかったことが知られている。後で夫の英雄的な行為を聞かされた妻は、「神が彼に力を与えたのだ」と語った。ドーキンスはこれを聞いて、次のように

9・11のテロ事件では、最

コメントしている。

「なぜその神は、もっと早くに介入しなかったのか。そんな回り道をせずに、テロリストに心臓麻痺でも起こせばよかったのに」

これも、信仰表現が常に当事者の実存的な経験の核に発することを理解しない、時代遅れの幼稚な議論である。

総じて、無神論者たちの議論には百年前からあまり進歩がない。マクグラスは「無神論の黄昏」と表現した。他者の意見に耳を貸さず、自分のドグマに凝り固まっている人を「ファンダメンタリスト」と呼ぶが、オックスフォード

の対論者たちはまさに「無神論ファンダメンタリスト」である。

■ 今後の講演

マクグラスによれば、無神論との対話はこれでひとまず終息する。来年は、「ギフォード・レクチャー」「カルヴァン生誕500年」「ダーウィン生誕200年」など記念講演の予定が目白押しとのことだ、これからの発言も楽しみである。

なお、今回の対談は、来年にもキリスト新聞社からまとめて公表される予定である。

(もりもと・あんり)